特 集

第17回日本骨粗鬆症学会報告

第17回日本骨粗鬆症学会
学会長 藤原 佐枝子

新年あけましておめでとうございます。昨年、９月17日（木）～19日（土）の３日間にわたり、「温故創新－骨折低減に向けて－」というテーマで、第17回日本骨粗鬆症学会を広島国際会議場で開催いたしました。

日本骨粗鬆症学会は約4000人の学会員を擁し、この１年間に1000人以上会員が増加しました。医師は、整形外科、内科、婦人科、公衆衛生などの多領域から構成されています。メディカルスタッフの会員数も増加し、会員全体の1/3強を占めています。地方での開催のため参加者数を心配していましたが、東京で開催された昨年を超える1600人以上の参加者があり、立ち見の会場、入りきれない会場もあり、盛況に学会を終えることができました。

骨粗鬆症に関連した骨折は、要支援・要介護の原因につながり、その低減は、高齢化社会での喫緊の課題です。骨粗鬆症診療における問題点は、薬物治療率と継続率の低さで、有効な薬剤が多くあるにも関わらず、骨折低減になかなか結びついていない点です。本学会では、地域の病院やかかりつけの医師とメディカルスタッフが連携して骨折予防に取り組む骨粗鬆症リエゾンサービスに取り組み、その中心的な役割を担う骨粗鬆症マネージャーが昨年４月に誕生し、リエゾンサービスは全国的な広がりを見せています。また、７月には改訂された「骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン2015年版」が出版されました。このような流れの中、今回の学会は開催されました。

プログラムでは、特別講演として、越智光夫広島大学学長に軟骨再生、宗圓聡近畿大学教授に骨粗鬆症Now and the Futureのご講演をいただき、会場いっぱいの参加者となりました。骨代謝マーカーに関するプログラムは、海外招待講演とシンポジウムを組みました。海外招待講演では、国際骨粗鬆症財団（IOF）と国際臨床科学連盟（IFCC）との共同で行われた骨代謝マーカーについての纏めをシェフィールド大学のEastell教授からご紹介いただきました。シンポジウムでは新しい骨粗鬆症の薬剤における骨代謝マーカーの動態などのトピックスがとりあげられました。その他、最近注目されている糖尿病と骨折に関して日本糖尿病学会との合同シンポジウム、新しいガイドラインを踏まえた骨粗鬆症薬物治療のシンポジウムなど７つを行いました。

学会２日目には、初めての試みとして、IOF、KSO（韓国骨粗鬆症学会）とのジョイント・セッションを開きました。私も参加させていただいているWHOの骨折リスク評価ツール（FRAX®）作成グループのリーダーで、IOF会長のKanis先生に、ヨーロッパでのFRAXを使った医療経済に基づいた骨粗鬆症薬物治療開始基準の考え方などについて基調講演でお話しいただきました。

最終日には、市民公開講座「なんとかしょうやぁ骨粗鬆症－結果にコミットする－」も開催され400人近い市民にご参加いただき、広島弁の司会のもと、和気あいあいとした雰囲気の中で講演・パネルディスカッションが進められました。

昨秋は台風が多く、９月の開催はひやひやしましたが、初日は曇りだったものの２日目、３日目は晴天に恵まれました。私は、長年、多くの原爆被爆者の方々のご協力のもとに疫学研究を続けてきましたので、この学会の初の女性会長として、被爆後70年の節目の年に広島の地で学術集会を開催させていただいたこと大変感謝しています。

最後になりましたが、多大なご支援をいただきました広島市医師会、広島市医師会臨床検査センターに、この場を借りて、心より感謝をいたします。誠にありがとうございました。